

特別講演

シンポジウム

本企画は

関西心理学会第 124 回大会準備委員会－日本発達心理学会国内研究交流委員会
連携プログラムとして実施いたします。

人間観の検証作業としての類人猿研究

黒田 末寿

(滋賀県立大学人間文化学部)

類人猿という人間に限りなく似た生き物は、人間とは何かを問う存在である。逆に、研究者の人間観が問題発見の糸口にもなる。そのような観点からここでの課題について考えてみたい。といっても、人間の子ども同士の豊かな関係の形成や成長過程における段階的な自立を扱う場で、霊長類学が発言することは多くない。問われ求められているのは、現にここにある子どもたちと、彼ら彼女らと身近に接している人たちへの具体的な方策であり、それに応える立場は臨床家である。私の立場から発言できるのは、現代社会、家族、教育のあり方はどう見ても、長い人類史で培われてきた社会的動物としてのありかた、ヒト属以降に進行してきた成長パターンの変化、そうした人間のベースにある特性と相容れそうにないということである。霊長類の子どもが<育つ>空間は多様な仲間がおり、上の世代の空間と接するオープンな構造であり、子どもは母親への信頼に支えられてそこに進出する。また、性的成熟度と身体・社会的成長の未熟さが対比する思春期は、類人猿にもかなり顕著に現れ、両性ともに社会的にクリティカルな時期である。人間は文化によって人間になるとする近代的な人間観の修正も含めて、これらについて考察してみたい。

子どもが育つ時空間をどう構想するか？

—生物・心理・社会の視点から考える

企画・司会：松嶋 秀明（滋賀県立大学）

話題提供：戸田 有一（大阪教育大学）

高橋 菜穂子（京都大学）

川俣 智路（大正大学）

指定討論：黒田 末寿（滋賀県立大学）

【 企画主旨 】

人間の「発達」は、真空で生じるのではない。家庭や学校、あるいは社会的養護の施設といったように、具体的な「場所」で生じている。普段、私たちは、自分たちの暮らしが、いかにこうした場所がもつ力に支えられているのか自覚していないけれど、「家庭」がない子どもが抱える困難さや、「進路選択」をおこなっていくことにともなう困難、イジメの問題がおきるたびに指摘される学校空間の閉鎖性などを考えるとき、それは顕在化してくる。昨今、盛んにとりあげられている「発達障害」の問題にしても、脳科学の進展にともなって、その発生メカニズムに迫る発見がなされつつある一方で、その障害をもって生きる人がかかえる「生きづらさ」はその人の生物学的な差異とこえて、社会・文化・歴史的な文脈のなかで起こってくる問題である。どのような場でその当事者が生きるのかによって生きづらさの様相は変わることが、そのことを示している。

発達がおこる「場所」もまた、所与ではない。有元・岡部（2008）によれば「文化」とは、現実の見え方のデザインである。いかに自然に、それ自体があるかのように見えても、人間はこの世の中を徒手空拳で生きてきたのではない。むしろ、人間は世界と関わるために道具をつくりだし、それを蓄積・継承し、現実のデザインと再デザインを繰り返してきたといえる。このような見方は、いまある不都合が変えられるものであるという可能性への展望をひらくものである。私たちは、生物学的な差異をふまえつつも、ここで人間の発達をどのようにとらえ、どのような時空間をつくっていくことが望ましいのかを考えていく必要があるだろう。

以上のような問題意識に基づいて、本シンポジウムでは、思春期、青年期にある人々の育ちや生きづらさにかかわって研究をすすめてきた3名の研究者から話題提供をいただく。そのうえで類人猿研究を鏡として、人間性について考察を深めてこられた黒田氏の指定討論をうけ、会場のみならず共に、人々の生きづらさを抱えていくための枠組みをいかに構想できるのか考えていきたい。

【 話題提供要旨 】

『みんなちがって、つながる・ふかまる—いじめ対策と虐待防止をつなぐもの—』

戸田有一（大阪教育大学 教育学部）

学校でのいじめを、民俗学者の赤坂(1986)は、コピー同士の子どもが抹殺しあう行為であると指摘した。「機会均等（幻想）のもとでの競争原理」のための学校・園なのか、「みんなちがって、つながる・ふかまる」ための学校・園なのか、実践者も研究者も問い続けてきた。しかし最近、PISA や全国学力テストへの傾倒の中で、それがないがしろにされているように思える。まさに「子どもが育つ時空間をどう構想するか？」を、何度でも何度でも問い返さないと、国、自治体、学校レベルの「学力」比較のなかに、追い

込まれていくのではないだろうか。たとえば、フィンランドは高い学力が着目されているが、いじめ被害者による学校銃乱射事件後、KiVa というプログラムによる対策が全国に広がっている。フィンランドの実践者も研究者も、このままでいいとは思っていないのである。

また、いじめと虐待の問題は共に、関係内での継続的な攻撃であり、家庭、学校、職場等の空間の縦横の時間的連続のなかで、かたちを変えて継続したり、世代間で影響したりする。しかし、いじめや虐待の研究の現状は、ある場や発達のある時期での、ローカルな用語を用いての、相互に独立な現象記述と対処構想になっている。欧州では近年、両方を視野にいた研究も見られるが、諸問題に共通する概念や全体像を把握することと、子どもが育つ時空間全体の中で個々の実践やプログラムを考える必要があるだろう。

『児童養護施設からみえる育ち—子どもの自立を支えるとは？』

高橋菜穂子（京都大学教育学研究科 博士後期課程）

筆者はこれまで児童養護施設の職員にインタビューを重ね、そこでの支援のありかたを考察してきた。児童養護施設に入所している子どもは、原則として18歳を超えると施設を退所しなければならない。そのため施設での支援において、職員が最も苦心するのは、子どもの退所後の生活を見通して、いかに彼らを自立まで導くのかという点である。家族を頼ることのできない入所児童にとっての自立は、単に施設を退所し就職することや、住居を確保すること、奨学金を得て進学することといった経済的な自立のみを指すものではない。自立とは個人の中で完結するものではなく、他者を頼りながら、共同で生きる社会の中に自分自身を位置づけることでもあるため、自分の生い立ちや家族との関係を整理し受け入れることや、職員など重要な他者との関係基盤を形成することも必要となる。本発表では、児童養護施設の職員へのインタビューで語られた年長児童2名の事例の変遷と、職員との関係性の変容をたどり、職員との関係を軸に自立へと向かおうとするそれぞれの子どもの姿を報告する。また、その中に立ち現われる自立支援の困難さや今後の課題を考察し、入所児童にとって自立とは何かを考えようとするものである。施設の入所期間と退所後という空間的・時間的な移行と、その狭間で子どもを支える職員の実践から、「時間」「場所の重なり」「人間の関わり」といった本シンポジウムのテーマとつなげて考えたい。

『高等学校における発達障害支援からみえる育ち—高校から地域社会への移行実践のフィールドワーク』

川俣智路（大正大学 人間学部）

保坂(2012)によると、思春期における移行には2つの概念が想定される。すなわち学校から社会への移行と、子どもから大人への移行である。高等学校の生徒は、非常に短い期間でこの2つの移行を経験しなければならない。育ちに特徴を持つとされる、あるいは発達障害があるとされるような生徒への支援でもそれは同様である。高等学校における優れた移行実践とは、高校というコミュニティから社会というコミュニティに移行することを支えるだけでなく、その過程に子どもから大人への発達を支える場が含まれていなくてはならない。

本報告では、「教育困難校」と呼ばれるA高校でのフィールドワークを通して、発達障害が疑われる生徒への移行実践について検討している。フィールドとなったA高校は、学校内の様々なコミュニティへの参加が難しい生徒、教育困難というラベリングがされた高校、人口流出が止まらず衰退しつつある地域コミュニティ、というそれぞれ課題を抱えた個人やコミュニティによって構成されている。こうした状況の中で、A高校では生徒の育ちのプロセスを通してコミュニティ同士が支え合い、そのプロセスが生徒の発達を促す、という実践が展開されている。当日はA高校の実践を検討することから、高校から社会への「移行」とそこにある育ちの場として高校と地域コミュニティの意義について検討したい。